

国幣五拾圓整、五百圓整などと印刷された文字と、定額儲金證書の表紙には「必勝儲金」と、大きな印が押され、まだ幼かった弟妹が、お小遣いをさいて貯金したものであろう。

今、これらのものが、空しくも悲しい遺品となって私の手元にある。

昭和二十三年、保母となって受け持った三歳児が、真夏の乾いた園庭におしっこで絵をかきながら、「戦争っていやだね」とつぶやいた。大人の口まねだろうが、まだ記憶の生々しいときだったから、私の胸にずしんと響き、今でもこの一言は、耳たぶの奥深く残り、折にふれ、この言葉が頭をよぎる。

家族全員を見送り一人残された私は、近々二度目の四国遍路に旅立とうとしている。

父と母の軌跡を訪ねて

神奈川県 佐藤 益躬

わが家では戦後外地から引き揚げたとき、アルバム・日記・書簡などほとんど大部分の記録を失ってしまった。母が五人の子供たちが亡き父のことを知らない哀れさを思い、遺骨とともに持ち帰った父・延四郎の日記帳の一部分がわずかに残っているだけだった。その日記は昭和六年の栃木師範学校の卒業式で始まっている。

昭和六年三月二十四日（火）晴

今日は卒業式だ。永久に記念すべき日、なんたいおろし男体風が冷たい。

九時二十分、卒業生着席。総代として最前列に席を占めた私は、実に感無量で今までの努力の結果と思うと嬉しかった。在校生・父兄・来賓着席、視学及び知

事閣下も着席し、式が開始された。

来賓や恩師が私の晴れ姿を見てくださったと思うと誇らしさを感じた。

私の父・延四郎は、小作農の染吉・トラ夫妻の五男五女の末子として、栃木県上都賀郡真名子村に生まれた。

貧農の家庭であったが、真名子尋常小学校高等科を卒業したとき、先生に薦められて給費制度のある師範学校を受験し入学した。まじめな性格で努力家だった。「人生は意気だ」というのが父の座右の銘だった。

父は、北押原尋常小学校訓導に任せられた。下野新聞に県内の教員の人事異動が掲載されたが、父の隣に栃木師範学校第二部卒業で新任の森下タカの名前があった。翌年、二人はそれぞれ五年男子組と五年女子組を担任することになった。翌年、引き続き六年の男子組・女子組をそれぞれ担任した。

昭和九年一月十六日（火）曇

朝、六年女子組の女兒が、「先生、これ森下先生から頼まりました」と言って紙包みと手紙を持ってきた。桜草の鉢だった。

この桜草を、お受け取り下さい。室咲きですので教室では無理でしょう。昼は日当たりの良い縁先に、夜はお部屋に入れて、毎日お忘れなく水を与えて下さるなら、このかれんな花は五月まで咲き続けることでしょう。

昭和九年一月二十六日（金）晴

昨夜、桜草が枯れて花が落ちてしまった夢をみた。それを彼女に見せている夢だった。教室に行くとき一緒に歩きながらその話をした。

「枯れたら、また持ってきてあげますよ」「いや、極力世話をしてみるよ。鉢を眺めたり、世話をするのも楽しみなものだ」

放課後、補習が終わって帰るとき、「靴を玄関へまわしておきましたよ」と言う彼女の親切が本当に嬉しかった。

昭和九年二月十八日（日）曇りのち晴

若い先生たち男女それぞれ三人ずつで日光の細尾リンクにスケートに行った。二時間ほど滑った。町の食堂の二階で昼食のとき、割りばしの中に入っていたつまようじの包み紙の歌の文句が、偶然にも森下先生と同じだった。

「遠く離れて、切れたとみえて、切れはせぬぞえ風の糸」

二人は、その年の四月十三日に結婚した。そして長男の私は翌年二月二十日に生まれた。

昭和十年九月十三日（金）曇

ずっと前から、自分は海外渡航を希望し、海外発展の熱に燃えていた。

今日、職員会議で校長先生がジャワ島で日本人の先生を一人募集しているが、まさか本校には希望者はいないだろうと発言された。下校時に校長先生に書類を借りて帰った。

この件については、母も双方の両親たちもすんなり了解したが、選考の結果不採用になった。そして二ヵ月後に、今度は関東州から栃木県出身の教員がないので募集するという話に応募して選考を受け、大陸へ転出することになった。

内地を去る直前に、五・六年、高等科一・二年と続けて四年間担任だった生徒たちの卒業文集の巻頭に「親愛なる卒業生を送る（昭和十一年三月二十三日）」と題した父の書いた文章がある。

「君たちは、一人一人社会の荒波に飛び込み、その力を試す時がきた。泳ぎ切るか、途中でおぼれるか。準備はよいか。泳ぐ距離はかなり長いのだ。波は大分荒れている。……『小を積み、大となす』これは二宮金次郎先生の生涯だった。一步一步堅実な歩みを続けられ、大成する。……愛する君たちの前途に幸あれと祈る。若き勇者よ、雄々しく進め。先生は力をこめて大声で叫ぶ。『七転八起の心を』……。」

昭和十一年四月三日、大勢の人々に送られて宇都宮

駅発の列車で、関東州普蘭店尋常高等小学校へ赴任の旅立ちをする。東京で兄の家に泊まり、兄たちと別れを惜しんだ。車窓から富士山にもお別れをして、車中で一泊し、五日に神戸港でうらる丸に乗船した。十二時に出港、瀬戸内海の航海は快適で月の照る内海の景色を味わった。門司では出港までに時間があつたので上陸して市内見物をした。女界灘で船は揺れた。船客はみな船酔いでぐったりとしてしまった。女界灘を過ぎると、濃霧のなかで船は警笛を鳴らし続けて進んだ。

船は八日の午前八時に大連港に着いた。埠頭は出迎えていた。普蘭店小学校首席訓導の福田先生の出迎えを受け、大連駅から汽車で二時間の普蘭店駅に着いたのは午後一時だった。校長先生は出張中で、福田先生の案内で民政署を訪ね、谷口視学と庶務課長にあいさつし着任届けを出した。初めて見るマーチョ（馬車）に乗って官舎に入った。

普蘭店はポーツマス条約で日本が租借した関東州の北端に位置していた。街は南の方が日本人の官舎街で、北の方が満人街と二分されていた。日本人は郊外の人も含めて約二千人で、だいたい役所・会社・学校に勤務する者だった。商業・労務関係は全部満人だった。日用品は民政署が経営する購買組合があり、伝票で買物ができた。官舎では家族が互いに助け合い、むつまじく生活していた。

小学校の校舎はレンガ造りで、設備もかなり整備されていた。ピアノが二台もあった。一学年一クラスで、いずれも五十人以下だった。児童は大部分が日本人子弟だが、各クラスに五、六人の朝鮮人、二、三人の満人子弟がいた。親たちは教育に非常に熱心で、毎日二、三人の母親が授業参観にきていて、児童の成績も内地に比べて比較的良く、学習態度も自発的、積極的だった。

広い塩田に続いて海がすぐ近くまで入り込んでおり、その先は渤海湾だった。ハゼやチヌ（黒鯛）がたくさん釣れた。郊外は広いリンゴ園だった。落花生の

産地で大勢の満人が農園で働いていた。冬の寒さは厳しかったが、春になって普蘭店神社の参道の桜並木は見事に開花した。

わが家では妹・洋子(昭和十二年二月二十四日生)、弟・克躬(昭和十四年十一月十日生)、妹・道子(昭和十六年十一月二十日生)と弟妹が増えていった。

着任後、二年生から六年生まで五年間受け持ったクラスを無事卒業させ、それぞれ希望する中学校・女学校に一人残らず入学させることができた。百パーセント合格の成績は開校以来のことで、校長や父兄たちに喜ばれた。かねてから父はもっと広い土俵で活躍したいと希望していた。ちょうど担任の児童を卒業させたのを機会に、旅順への転勤を校長に願いつたが、国民学校発足の第一年で研究校になり、公開授業をするので是非とどまるようにと言われた。そして、翌年には精進が認められて、関東州の最南端にある旅順への転勤の内示があった。希望していた日本人学校ではなかったが、満人の学校としては模範校の旅順師範公学校附属公学校だった。

旅順は、明治三十七年に始まった日露戦争の舞台として名高く、聖地旅順といわれていた。広瀬中佐の旅順港口閉塞、東鶏冠山北保塁や二〇三高地の攻防戦、乃木大将とステッセルの水師営会見、桜井忠温の戦記小説『肉弾』、与謝野晶子の詩『君死にたまふことなかれ』などは昭和一けた以前生まれの日本人はだれもが良く知っていた。尋常小学校二年の修身の教科書には広瀬中佐が、六年には乃木希典がそれぞれ紹介されていた。「杉野は何処、杉野は居ずや……」という小学校唱歌『広瀬中佐』や「庭に一本、なつめの木……」という『水師営会見』は国民の愛唱歌だった。

日露戦争後、租借地の関東州経営の中枢は旅順だった。関東州庁や関東軍司令部があった。満州事変後に関東軍司令部が奉天へ、昭和十二年に関東州庁が大連へと移転した後は軍港・要塞と戦跡が残った。

旅順の旧市街には海軍司令部・市役所・高等法院・刑務所・旅順病院などがあり、商店が並ぶ商業地域は多くの人々にぎわっていた。旅順駅のわきを流れる龍河を隔てた新市街は、博物館・動物園・植物園(後

楽園）・図書館・運動場・関東神宮などがある落ち着いた町並みで、旅順工科大学・旅順高等学校（旧制）・旅順中学校（旧制）・旅順高等女学校（旧制）・

旅順師範学校・旅順師範学校附属小学校・旅順師範公学校・旅順師範公学校附属公学校などがある文教都市だった。ロシアが都市計画をした新市街は、白亜やれんが造りの重厚な建物がそここにあった。満人が迎^{ムカ}春花と呼んでいるレンギョウの黄色い花が春の訪れを知らせる。白や紫のかれんな花をつけるライラックが薫った。街路樹のアカシアが咲くと甘い香りが街にあふれた。黄金台海岸の海水浴や柏嵐子でのキャンプ、魚釣り、蟹釣り、ウズラ狩り、そして大正公園でのスケートなど楽しい思い出は尽きない。

父はあこがれていた旅順に転勤できて張り切っていた。同胞である満人の教育という新しい仕事に意欲的に取り組んだ。最初わが家は中村町の平屋の赤れんが造りの官舎だったが、子供たちが大きくなって狭くなってきた。普蘭店小学校のときに教え子だった子の父親が民政署の営繕課長になっていて、その人の好意で

明治町の赤れんが二階建ての官舎に移った。昭和十九年一月十八日に三男の直躬が生まれて、わが家は七人家族となった。

昭和二十年になると戦局はひっ迫してきて、二月に硫黄島玉砕、三月東京大空襲、四月には米軍が沖繩本島に上陸した。そのころ父は無理がたたって体調を崩していた。それでも責任感の強い性格で、身体をむしばまれるのを承知で無理を続けて病を重くして、肋膜炎で五月十三日から自宅療養をすることになった。戦局から遠く離れていた旅順の学校関係者にも、関東軍の南方派遣の後の補充のための、いわゆる「根こそぎ動員」によって召集令状がきた。先輩や同僚の先生方が出征の挨拶に見える度に、絶対安静の病状で心ばかりが焦り、病状は悪化していった。病が重く国のために奉公できない自分のふがいなさや、教師が出征していった後の学校のことを思い、病床で涙していたのではなからうか。八月十五日には旅順工科大学や旅順高等学校の生徒たちにまでも召集令状がきた。そして、ついに八月九日にはソ連が参戦した。国境を越えてソ

連軍は満州国になだれ込んできた。関東州には戒厳令が発令された。

八月十五日、前日に父を往診した医師に散髪することを許されたので、母は床屋に出張してもらおうと電話を借りに、すぐそばにある明治町の交番に行った。巡査が二人ラジオの前で頭を垂れていた。玉音放送だった。

八月二十二日、ソ連軍の先遣部隊は大連の周水子飛行場に到着した。司令官ヤマノフ少将が日本軍を武装解除した。同時期に司令官イワノフ中将が三澗堡飛行場に到着した。旅順方面海軍特別根拠地隊司令官の小林謙五中將との間で降伏文書を交換し、調印した。ソ連にとって旅順は、日露戦争で激しい攻防の末に日本に奪われた、屈辱の忘れがたい土地だった。したがって大連には平和進駐、旅順は武力進駐と明確に区別していた。司令官の位にも違いがはっきりとされていた。駐屯していた一万五千の日本兵は、武装解除され拘留された。中国人居住の市街地には、青天白日旗とソ連国旗が軒並みに掲げられた。ソ連軍の占領入場式が行

われ、戦車に花を飾り、スターリンの肖像を掲げて、パレードは日露戦争の兵士が眠る郊外のロシア墓地まで行進した。

翌日から街の治安が乱れた。戦車を先頭に進駐してきたソ連の囚人部隊の若い兵隊たちは、上官の目の届かないところでマンドリン銃をかざしながら金品を強奪し、特に腕時計と万年筆を珍しがり集め、さらに「マダム、ダワイ」と婦女を要求した。若い娘たちは競って断髪し、男装した。旅順市民は縁故を頼って大連へ移動し始めた。九月十二日に新市街の日本人に退去命令がでた。父が動けないのでわが家はそのまま新市街に残った。

ある日、師範公学校の満人の生徒が、寄宿舎の在庫を皆で分けたと報告し、その食糧を持ってきてくれた。自分たちだけで分けてしまってもよいのに、病気の日本人の先生のところへ届けるという彼らの親切に、父は涙を流して喜んだ。また、満人の高等科の教え子が郊外からわざわざ野菜を届けてくれ、父のためにと洋梨を置いていった。母はどうせ略奪されてしま

うかもしれないので、お礼に衣類をやった。次にまた彼がきたときには、母は乳母車とひな人形をやった。二階の窓から、喜んで帰る彼の後ろ姿を、八歳の妹はじっと見ていた。

わが家の隣の蚕糸試験場跡にソ連軍の部隊が駐屯していた。この部隊は老兵ばかりだった。ある日、指をけがした兵隊が滴る血を指で押さえてわが家に駆け込んできた。母が手当てをしてやると、翌日乾パンを持ってお礼にきた。アメリカのレットテルがはってあった。母は包帯をかえてやった。大きな皿が欲しいと言うのでやると今度は缶詰をくれた。それもアメリカ製だった。私たちは、その「オムスクのおじさん」と仲良しになった。もう少し我慢すれば妻と二人の息子のところに帰還できると、嬉しそうにゼスチャーで教えてくれた。

十月になると、新市街の日本人は全部輸出してしまった。わが家は新市街に残った最後の日本人家族となつてしまった。夜になるとどの家も真っ暗で人の気配がなく、街はゴーストタウンとなつてしまった。そし

てついにその日がきた。十月四日、二人のソ連兵がやつてきた。将校とマンドリン銃を構えた兵隊だった。

玄関のドアを乱暴にたたき、母が鍵を開けると、「ダワイ、ダワイ」と手を振りながら入ってきて、畳の上を軍靴のままずかずかと二階への階段を上がった。父の伏せっている寝床を見て一瞬たじろいだが、さらに大声で「ダワイ、ダワイ」と繰り返すだけだった。私は走ってオムスクのおじさん呼びに行った。おじさんはすぐにきてくれ、将校としばらく話していた。二人が帰って姿が見えなくなると、おじさんは両手を広げて首を傾けた。法没子（イニテメ）（どうにも、しょうが無い）だった。

母に言われて、私はすぐ近くの明治町の交番へ走った。巡捕（満人の巡查）しかいなかった。日本人の巡查部長はどこへいったか分からなかった。家に戻って母にそのことを言うと、大迫町の交番にと言われて私はまた走った。そこも同じだった。新市街には交番が四カ所あるので、三つ目の日本橋の交番に行ったがそこも駄目だった。最後に千歳町の交番に行ったが、だ

れもいなかった。交番のそばで日本兵の捕虜が電柱に登って電気工事をしていた。ソ連兵がマンドリン銃を持って見張っていた。「ほうや、巡査はみんなら致されていってしまったよ」と捕虜の兵隊が教えてくれた。

家へ帰ってそのことを母に話した。新市街には日本人はいなかった。母はしばらく思索していたが、以前隣に住んでいたが今は旧市街に移った、ただ一人居所の知れている父の同僚の上妻先生に頼るしかないと言った。私は母の書いた手紙を持って、旧市街の上妻先生を訪ねることになった。初めて訪ねる家だった。区画整理のはっきりしている新市街と違って、旧市街は雑然としていた。あちらこちらと迷いながら、やっと先生の住まいを捜しあて、なんとか役目を果たした。先生は考え込んでしまった。迷惑な頼みだったのだから、先生の奥さんは断ればよいのではないかと小さい声で言っていた。夜になって日本人のいない新市街に行くことは危険なことだった。しかし、先生はしばらく思索した後、「分かった。ご苦労さんですがすぐ帰

りなさい。手配をして、今夜行くから」と言ってくれた。

私は役目を果たして帰路についたが、日はすでにとっぷりと暮れていた。にぎやかな旧市街を出て駅を過ぎ、龍河に架かる日本橋を渡ると、街はしんと静まり返っている。私のほかには人は一人も歩いていなかった。日本橋交番の前にソ連兵がマンドリン銃を抱えて立っていた。「ダワイ、ダワイ」と言っていてマンドリン銃を左右に振る。ここで追い返されても帰るところがない。ソ連兵は私が無人になった家へ入って泥棒する小^{シヨウハイ}児と思っているらしい。「ヤボンスキー、ヤボンスキー（日本人、日本人だ）」自分を指さしながら私は必死に叫んだ。ソ連兵はうなずいて、銃口であちらへと指し示した。私は走ってそこを通り抜けた。真っ暗な師範学校の前を通り、動物園と植物園の間の大通りを急いだ。中学校の前の満人の店に、ポツンとあかりがともっていた。ここまでくれば家は近い。十一時過ぎにやっと家にたどり着いた。その夜の夕食のおかずが鯖の味噌煮だったことを、なぜか今でも鮮明に覚え

ている。深夜になって上妻先生が訪ねてきて、明日、ターチョ（荷馬車）三台を手配したと言って帰っていた。母と私は徹夜で荷物の整理をした。

翌日、かさばる家具類はそのまま残して、二台のターチョに昨夜まとめた荷物を積み、私と弟妹五人がその上に乗った。残りの一台に布団を敷き父が伏せ、母が付き添った。途中で略奪にあらう危険があったが、公学校の教え子たちがそれぞれ付いてくれ、何ごともなく旧市街に着いた。荷物は大連に移転して空き家になっていた所へ持ち込んだ。父は主治医の加来先生の好意で旅順医学専門学校附属病院三階の特別室に入院した。その夜は、母子六人も病室でソファー二つを並べ泊まった。鉄輪のターチョに揺られてすっかり消耗してしまった父はものも言わず、じっと天井を見つめていた。

翌六日の朝、上妻先生がおにぎりを持ってきてくれた。タイ米の握り飯だったが、父はうまいと二つ食べた。その時、医学生が病室にきて、今日病院がソ連軍に接収されることになったと言った。母と上妻先生が

善後策を相談しているとき、父の容体が急変した。母が父の前に子供たちを呼び、一人一人の名前を言ったが、父はもうそれにこたえることができなかった。母に言われて、私は医師を呼びにいったが、午後三時までに全員退去せよという命令が出ていて医局は混乱していた。

父の臨終を宣した医師は、言いにくそうに病室をすぐ明け渡すようにと言った。父のてのひらにはまだぬくもりが残っていた。せめてお棺がくるまでと頼んだが、待つてくれなかった。布団に包まれた遺体を玄関まで運んだが、正面は高い石の階段だった。台車は使えず、遺体を前庭まで降ろさなくてはならなかった。上妻先生が頭の方を、母と私が足の方を持った。医学生が見兼ねて手伝ってくれた。アカシアの木の下のテニスコートに遺体を横たえて、お棺がくるのを待った。見上げると病院のメインポールには赤いソ連の国旗がはためいていた。

吹二俵かまの石炭を積み、マーチョ（馬車）で火葬場へ遺体を運んだ。僧侶を呼ぶこともできなかったの

で、前田主事先生が観音経を唱えた。仮家に帰ると下の妹が「お父さんをどうした！」と母の足にすがって泣いた。

せっかく旧市街に移ったのに、この日本人にも退去命令がでた。日本人は全員旅順から退去させられることになった。約四十キロメートル離れた大連への避難列車が一日一列車でていた。新市街からは、ターチヨ二台の荷物を運んだが、避難列車は自分で持てる大きさのものを一人二つまでと制限されているので、母と私はまた徹夜で荷造りをし直した。八日、父はあこがれてきた旅順を三年半後に遺骨となって私に抱かれてそこを去ることになった。

大連では、とりあえず以前父の上司で、その当時は、大連静ヶ浦小学校校長であった皆島先生宅に身を寄せた。数日後、役所で指定された真弓町に移った。れんが造りの二階建ての家で三部屋あったが、下の六畳がわが家で、二階の六畳には夫婦と二歳の子供がいる元教師のKさん一家が入り、三畳には独身の大学生のSさんと三家族同居だった。私は南山麓小学校に転校

した。

日本人のほとんど大部分は職を失い、個人財産を売り食したり、にわか商人になったり、ソ連軍に雇われたりした。前から大連に住んでいた人たちは持ち物売ってたけのこ生活をしていたが、家財一切を旅順に置いてきてしまったわが家では、最小限の身の回りの物しか運べなかつたので売れる物がなかつた。家族全員で、リングゴにかぶせる紙袋はりの内職をしたが、収入はわずかだった。

母は市電で通って役所で土地台帳を整理する事務の仕事をした。私は学校をやめて、Sさんの仕事を手伝った。Sさんがマーケットに一坪の店を借り、朝早く魚市場に行つて手揚げかごいっばいの魚を仕入れてくる。それを私が挽肉機でミンチにして、さつま揚げを作つて売つた。もうかつた。しかし、Sさんが逮捕された。脱走兵だったともいわれたし、またそのころ脱走した捕虜の数合わせのために無関係の人をら致したともいわれている。あるいは仲間たちの密告で逮捕されたかもしれない。うわさではソ連に連れて行か

れたとのことだが、その後どうなったか分からない。

そして、また家が変わった。北斗町のその家は元は大連汽船の社宅だった。一人一畳で今度も六畳一間だった。このころになるとトウモロコシのパン、高粱や粟の雑炊が主食になった。主食だけで副食はなかった。それも一日二食だった。

母が漁網工場の女工になった。綿糸を紡ぐ仕事だった。しばらくして、そこで少年工を募集しているというので私も働くことにした。母とは別の工場だったが、手先の器用な日本人の女性たちを集めてカムチャツカで蟹をとる網を編む工場だった。私は掛工といって、竹製の編み針に糸を巻く仕事だった。一人で十人の女性を受け持ち、女性たちが空になった編み針を私の前に投げてよこすと、私はそれに糸をいっばい巻いて投げ返してやる。仕事は単調だったが、怠けていると針がたまってしまうとグループの能率にも影響する。

初めての月給は嬉しかった。どのような計算だったのか、どれだけの価値だったか分からないが、もらった金額は百三十五円だったということだけは今でもは

っきりと覚えている。紫色（百円）、桃色（十円）、緑色（五円）のソ連の軍票だった。母は私の初月給で米を買ってきた。そのころ、わが家ではもう一口一食になっていたので、「米でなく、高粱ならいっばい買えるのに」と私が言うと、母が、「六人そろってお米を食べられなくなるかもしれないからね」と言った。その言っている意味が分かって私は黙ってしまった。

久しぶりで家族全員が白い飯を食べた。市場の端に白菜の外側のくず菜だけを売っている店があって、おかずはそこで買って作った味噌汁だけだったが、弟や妹たちはにぎやかにはしゃぎ、その夜はお祭りのようだった。

引揚船が来るといううわさがときどき流れては、うわさで終わった。蒋介石の国府軍が支配していた地区はアメリカと話し合いが成立し、壺蘆島からの引揚げが始まっていた。関東州はソ連軍が占領し、そのため八路軍の支配下になって孤立し、日本との連絡が断られていた。奥地の開拓団の避難民たちの収容所では毎日死者が出て、校庭の隅に大きな穴が掘られて埋めら

れていた。このままでは子供が死んでしまうので、死んでしまうよりはと泣きながら満人に子供を売る親もあった。

二度目の冬がきたが、引揚船は来ない。正月は三日間、工場は休みだった。越年資金がなく、母は歯医者に行つて金歯を抜いて売つてきた。三食分の粟しか買えなかった。このころになると味噌やしょう油が買えなくて、調味料は塩だけになった。元日の朝は、粟の雑炊で祝つた。電気も止められてしまつていた。

二月になって、待ちに待つた日がきた。引揚げだ。

引揚許可通知を受けて、母は二つのことをした。家財を整理し、残りのものすべてをたいて風呂を沸かした。六十日ぶりの風呂で、子供たちは萎えた体のあかを落とす。また、埠頭の検問で遺骨が乱暴に扱われることがあるというのを聞いて、白い布で六つの袋を作つて父の遺骨を分けて、各人がそれぞれ身につけて持ち帰ることにした。一つが事故に遭つても、どれかが内地に持ち帰れるようにした。お金は一人千円まで持ち帰れることになったが、わが家は家中全部で二

百三十円しかなかった。

大連埠頭に集合し、待合室で荷物に寄り掛かつて一夜を明かした。翌朝、水平線に黒い点が一つ見え、だんだんと船の形がはっきりしてきた。待ちに待つた船が着岸した瞬間には、歓声があがった。恵山丸の船尾には、一年半ぶりに見る日の丸が揚がっていた。

恵山丸は昭和二十二年一月三十一日に大連港を出港した。貨物船の船倉に何層か床が張られ、隙間のない雑魚寝だった。寝返りをうつ度に、腹巻きに納めた父の遺骨が砕けた。船員たちは親切だった。いま内地で流行している歌だといつて「リンゴの歌」を歌つてくれた。せっかくここまで頑張つたのに船内で亡くなつた人もいた。水葬の合図にポーポーと汽笛が鳴つた。また、子供が生まれて船長が名付け親となつて、船名にちなんで恵子と命名された子もいた。

二月三日に佐世保港に着いたが、入江で二泊した。祖国の山の緑は濃かった。はしけで上陸し、DDTの白い粉の洗礼を受けた。海軍の兵舎に入ったが、病人が出て三泊した。二月八日に汽車で佐世保をたち、栃

木島の母の実家に落ち着いた。

母は復職し、北押原小学校に勤務し、子供五人を育てていくことにした。その努力が認められ、昭和三十七年五月十三日、母の日に栃木県知事から模範母親表彰を受けた。翌日の下野新聞に、満州引揚げの一教員が女の手一つで三男二女の教育に身を捧げた姿をたたえる記事が載った。

その母は、平成八年十一月十七日に八十五歳である世に旅立った。二十二日の横浜・妙蓮寺斎場での葬儀で、私は喪主として次のような挨拶をした。

「私の家族は、戦前に中国の旅順に住んでおりましたが、終戦の年に父を失いました。私が十歳のときでした。栃木県に引揚げ後、母は小学校の教師に復職して私たち兄弟妹五人を育ててくれました。

子供たちそれぞれ独立した後は、戒名「浄孝歌仙大姉」に「歌仙」とありますとおり短歌を趣味として、二冊の歌集「乳母車（昭和五十五年）」「楡の街（平成三年）」を自費出版しております。

母は八十五歳の天寿を全うしましたが、父と母はわ

ずか十一年間の夫婦でしたし、天国の父は三十四歳のままでしょうから、五十一年ぶりの再会がうまくいくかどうか、母が迷子にならなければよいがと、今、そんなことをふっと考えております」

満州根こそぎ動員より引揚げまで

神奈川県 佐藤 令一

はじめに

昭和二十年、私は三十八歳の陸軍二等兵だった。五月の「満州根こそぎ動員」によって牡丹江の奥地樺林部隊に入隊した。応召したとき、私は伝統ある官立旅順中学校で数学の教官として昭和二年以降十八年間は教鞭をとっていた。この中学校は日露戦争後満州で活躍している日本人子弟の教育の場として、日本政府が明治四十二年に創設した満州における草分けの官立中学校であった。

五月十二日、私は学徒動員の引率教官として旅順市